細川幽斎没後 400 年記念
第 27 回熊本大学附属図書館貴重資料展

解説目録

期間　平成 22 年 10 月 30 日(土)～11 月 1 日(月)
会場　熊本大学附属図書館自由閲覧室

若き日の細川幽斎

― 永青文庫蔵・織田信長文書を中心に ―

公開講演会・第 5 回永青文庫セミナー
永青文庫所蔵の信長文書の魅力
講師　稲葉継陽　熊本大学文学部附属永青文庫研究センター教授
日時　平成 22 年 10 月 30 日（土）14:00～15:30
会場　放送大学熊本学習センター講義室(附属図書館隣)

織田信長朱印状（天正十年［1582］）四月廿四日
本能寺の変直前、信長の藤孝に対する現存最後の指令文書であり、中国出陣を命じる。

源氏物語寄合書(54冊)のうち藤孝書写「帚木(ははきぎ)」

平成 22 年度　熊本大学附属図書館・熊本大学文学部附属永青文庫研究センター

細川幽斎（藤孝）の前半生を中心に

幽斎（藤孝・天文3年生―慶長15年没　1534-1610）は、将軍足利義晴に仕えていた三淵晴員を父に、儒学者清原宣賢の娘を母として京都に生まれた。細川元常の養子となり和泉守護細川家を継いだという。13歳で元服し、藤孝と名のり与一郎と称した。将軍義藤（義輝）の側近として申次を勤め、従五位下兵部大輔に任ぜられる。永禄８年(1565)義輝が殺害された後、弟の一条院覚慶（還俗して足利義秋）を擁して各地を遍歴した。明智光秀らと義秋の将軍就任を計り、織田信長の援助で永禄11年(1568)に入洛して将軍宣下（義昭と改名）をうける。

しかし信長と義昭の関係は永禄12年10月頃から悪化しはじめ、信長は義昭に対して永禄13年正月に五ヶ条の「条々」を、元亀３年(1572)９月には十七ヵ条の「条々」を突き付け、翌年の義昭二度の挙兵と没落によって、信長は京都・畿内における覇権確立へと大きく前進した。

この信長・義昭決別期にあたる元亀４年２月から信長が本能寺で横死する天正10年(1582)に至るまでの永青文庫所蔵織田信長発給文書59通は、信長配下の部将・細川(長岡)兵部大輔藤孝らの軍事活動を伝える一級史料であるだけでなく、信長の「天下布武」の実相をまざまざと見せつける白眉の文書群となっている。今回の展示は18点を選んでその軌跡を辿る。

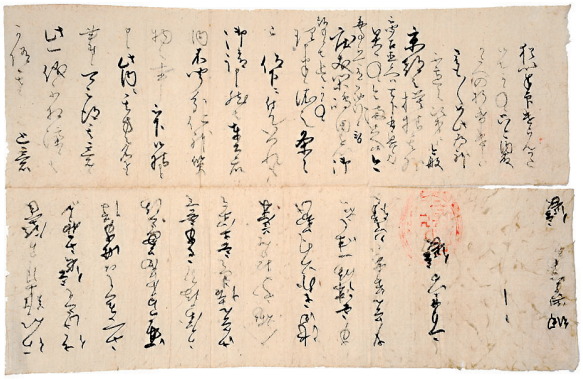
周知の如く、織田信長は天正10年６月２日、明智光秀の謀反によって本能寺に倒れた。直後に藤孝は嫡子忠興とともに剃髪、光秀の誘いを拒絶し、ほどなく名を幽斎玄旨と改めた。ここで信長後の覇権を握ったのが羽柴秀吉であり、その発給文書を２点紹介する。これらは幽斎が京都西岡に三千石の知行を宛行われ、秀吉のもとで文化的役割を担いながら、忠興と共に丹後十一万七百石の豊臣大名となったことの証しである。

藤孝は信長と同年生まれであった。信長が没したのが49歳、従って藤孝が出家し幽斎となるのも49歳である。そして信長の死とともに藤孝の前半生は終る。その毎日は戦争に明け暮れる日々であった。77歳の長寿を得た幽斎ではあるが、苛烈な前半生の記憶は彼を老練な政治通へと押し上げ、近世大名肥後細川家の礎が築かれることになった。

ところで幽斎のその後の活躍を大きくしたのが文学の力である。足利義輝配下の幕臣時代には室町幕府の故実書の収集に努め、連歌や和歌の会に出座し、多くの書物を写して実力を養っていった。藤孝の文学的事績を決定付けたのが元亀３年(1572)12月に開始された、三条西実澄（実枝）からの古今伝受である。その古今集講義と切紙相伝は１年６ヵ月をかけて32回に及んだ。この時藤孝は、義昭と信長との不和、信長への帰属という政治的決断の真っただ中にあり、彼の「古今伝受」という行為は、政治的激動の渦中で生まれた学芸伝承への強い意志に支えられていたと考えてよい。

藤孝の学芸事績のうち、その若い時代に書写または収集した歌書・連歌書・源氏物語・故実書など９点を紹介する。若き幽斎の学芸修業への瑞々しい情熱を感じ取っていただきたい。

1．織田信長文書



(1)(元亀四年)二月廿六日　織田信長朱印状

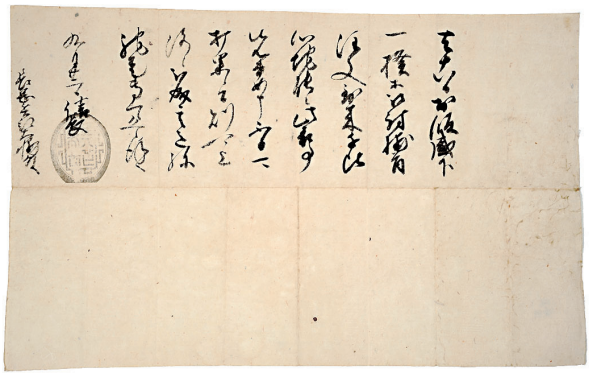
1通　26.0×40.5

岐阜にあった信長が京都の藤孝に与えた朱印状。当時、将軍足利義昭と決裂か和睦かの瀬戸際にあった信長は、近臣を義昭のもとに派遣して交渉を進めていた。その一方で、藤孝からは義昭及びその周辺勢力の動向(「京都之模様」)について報告を得つつ、畿内における味方の組織化を藤孝に依頼していたことが本文書から判る。一月後、藤孝は上洛した信長を出迎え、近世大名としての出発点に立つことになる。

(2)(天正二年)八月五日　織田信長朱印状

1通　26.7×43.9

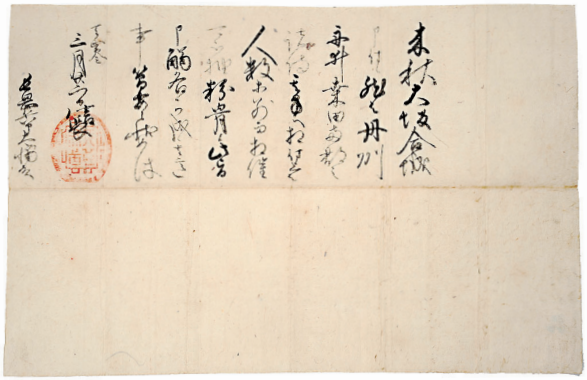
信長が伊勢長嶋の一揆攻めの陣中から、大坂本願寺攻めを担当していた藤孝に発した朱印状。長嶋城の落城は時間の問題で、家臣には伊勢・尾張の一揆を全滅させるよう命じた(「悉　楯切ニ申　付　候」)と伝え、藤孝にも、本願寺を「根切」とする覚悟で一揆に対応するよう命じている。藤孝が、信長と一揆(一向一揆)との全面対決の矢面に立っていた事実を象徴する文書である。



(3)(天正二年)九月廿二日　織田信長黒印状

1通　29.0×46.0

藤孝が河内飯盛城下で一揆相手にあげた戦功を信長が賞した文書である。永青文庫には、この時の戦闘の様子を藤孝自身が親しい人物に報告した長文の自筆書状が伝わっており、じつに一揆の首七・八〇〇を捕ったと述べている。この年6月、藤孝は三条西実枝より古今集切紙の伝授を受けていた。藤孝の古今集解釈秘伝の学びは、まさに殺すか殺されるかの日々の中を縫うようにして進められたのであった。



(4)天正三年三月廿二日　織田信長朱印状

1通　29.0×44.5

本願寺との決戦を計画した信長が、藤孝に丹波国船井・桑田両郡の武士たちに対する軍事指揮権を与えた朱印状である。両郡は当時の藤孝の所領に隣接していたが、信長への従属を拒む中小の武士領主が割拠する地域であった。信長は、室町幕臣期以来、丹波の領主層との所縁を有していた藤孝を通じて彼らを組織化し、本願寺との決戦に動員しようとしたものと推察される。

(5)（天正三年）五月十五日　織田信長黒印状

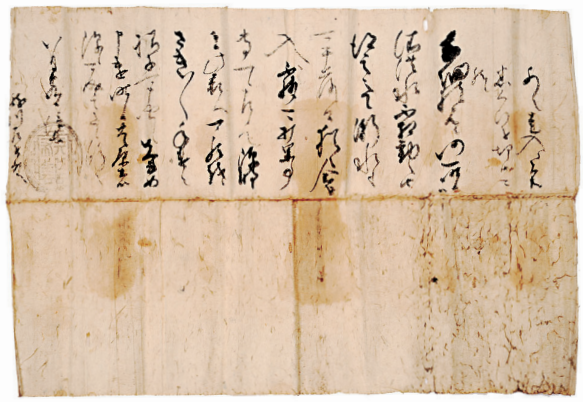
1通　28.0×46.2

武田勝頼軍に包囲された三河長篠（ながしの）城の救援に出馬した信長が、岡崎から京都の藤孝に送った黒印状。注目すべきは、藤孝が鉄砲の射手と火薬を調達準備しているとの報告をうけた信長が喜んでいることで、京都にあって軍事物資や人員を獲得し前線に送る藤孝の手腕が光る内容である。藤孝は武田騎馬隊を信長の鉄砲隊が撃破した「長篠合戦」における、影のキーマンであった。

(6)（天正三年）五月廿六日　織田信長黒印状

1通　28.6×45.0

岐阜に凱旋した信長が、五日前の「長篠合戦」での大勝利を京都の藤孝に速報した文書。敵の総大将勝頼の生死は不明であるが、甲斐・信濃・駿河・三河の軍兵で生き残った者はさほどないと豪語し、残った「小坂」すなわち大坂本願寺は敵として数に足りない、と言い放っている。大勝利に高揚する信長の姿を彷彿とさせるが、しかし、本願寺との対立は、このあと泥沼の様相を呈することになる。



(7)（天正三年）八月廿九日　織田信長黒印状

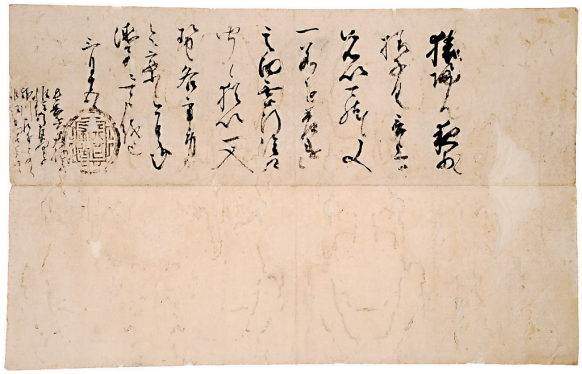
1通　29.0×43.0

信長が越前一揆攻めに際して、「降参した者もすべて首を切れ」と瀧川一益（たきがわかずます）に指示した文書。越前攻めには藤孝を含む織田家中の有力部将の多くが参加していたが、瀧川宛ての本文書は細川家に伝わった。その理由は、信長の一揆殲滅方針を徹底すべく、本文書が前線の部将間で回覧されたためと推察される。紙面の著しい汚れと、折り表（おもて）にあたる文書右下部分にみえる顕著なけば立ちが、それを裏付ける。

(8)（天正四年）四月三日　織田信長朱印状

1通　29.2×46.3

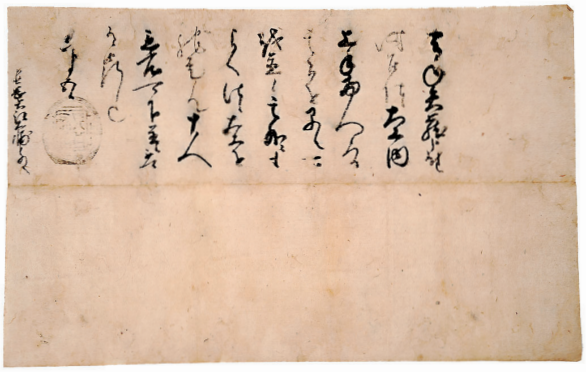
大坂に籠城（ろうじょう）の一揆衆の処置に関する信長の指示を前線の藤孝・光秀に伝えた朱印状。本願寺周辺の麦を刈り取って兵粮攻（ひょうろうぜ）めにすること、「籠城」した「男女」（民衆）は助命し、「坊主」は赦免しないという方針を徹底するよう命じている。当時、合戦に際して近隣の民衆が領主の城に避難することは稀ではなかった。一揆との対決の中で藤孝は、誰を殺し、誰を生かすか、究極の判断を迫られていた。



(9)（天正五年）三月十五日　織田信長黒印状

1通　29.5×46.5

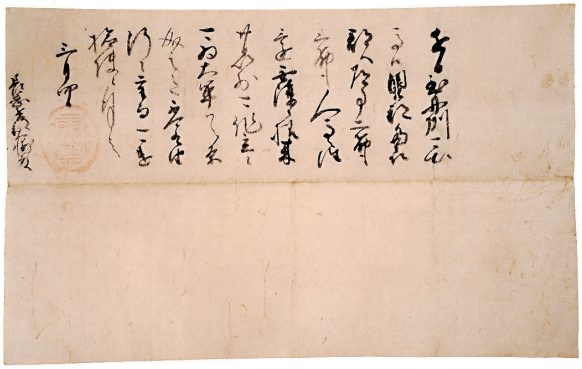
和泉国南部に陣をはり、紀州の根来寺勢力を攻撃中の信長が、藤孝ら前線の部将四名に宛てた黒印状。冒頭部分には、「『猿』が本陣に帰ってきて前夜の戦の様子をつぶさに報告した」とある。この「猿」については、羽柴秀吉を指すという説と信長配下の忍びの者の呼称であるという説とがあるが、仮に前者なら、信長の秀吉に対する親愛を表現したものとみることも可能である。



(10)（天正五年）六月五日　織田信長黒印状

1通　29.1×46.0

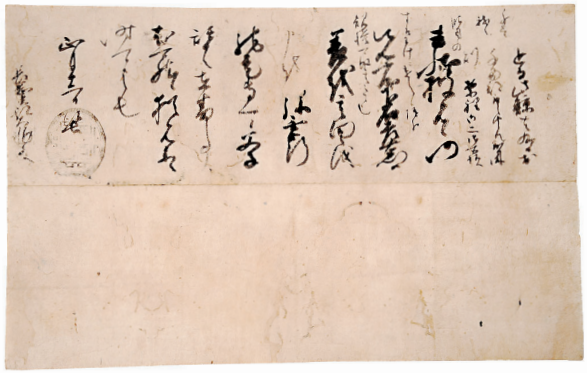
安土城着工翌年に比定される黒印状で、「藤孝が昨年送ってよこした大工に非常に腕の立つ者が二人いた。急いで派遣して欲しい。その他にも腕のいい大工十人を急ぎ派遣せよ」と伝えている。当時の京都には、大寺社や貴族の邸宅の普請を担当する高度な技術を有した建築職人集団と棟梁（大工）が多く存在した。京郊西岡に拠点を持つ藤孝には、職人集団の提供による安土城普請への貢献が求められたのである。



(11)（天正六年）三月四日　織田信長朱印状

1通　28.9×46.1

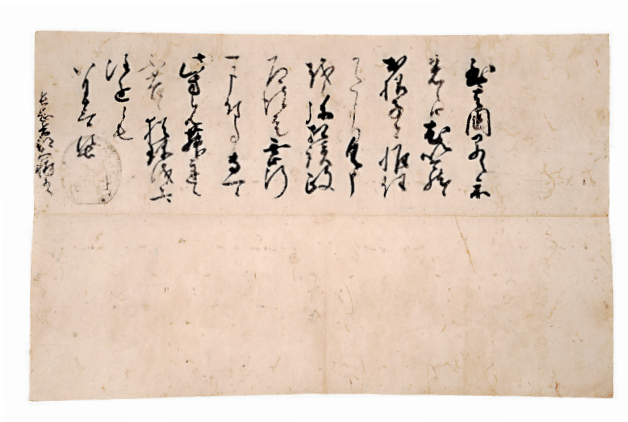
信長が敵対する波多野氏の拠点八上城を明智光秀に攻略させるに際して、藤孝に発した朱印状であり、八上城のある丹波国多紀郡及び奥郡へ通じる軍道を3月20日までに完成させるよう厳命している。丹波と京都とを結ぶ交通の要所を本拠とする藤孝には適任であった。また、藤孝が大規模普請を実現しうる夫役の集中的動員のための手段を有していたことも、本文書から窺い知ることができる。



(12)（天正七年）正月十二日　織田信長黒印状

1通　29.2×46.2

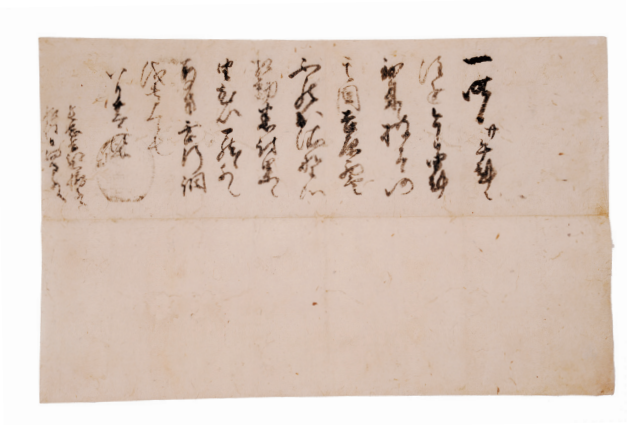
前年に信長に謀反した荒木村重が籠城する摂津国有岡城を攻撃するため、付城に越年で在番していた藤孝に送られた文書。村重の謀反は信長にとって衝撃であり、有岡城攻めは一年間にも及んだ。信長は藤孝の越年在番の労をねぎらい、子息との在番交替を許可するとともに、追而書では藤孝に鯨を「すそわけ」すると述べて、真冬の在番辛労への心配りをみせている。



(13)(天正八年)八月十三日　織田信長黒印状

1通　29.6×45.8

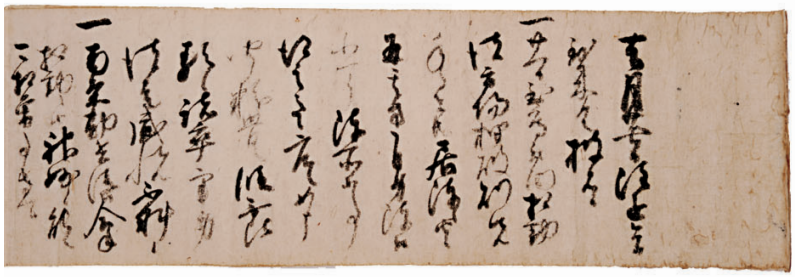
丹後に国替(くにがえ)となった藤孝から入国の報告を受けた信長が発した返書である。注目すべきは、「惟任(これとう)」＝明智光秀が藤孝の丹後入国の様子を詳しく信長に報告していること、信長が丹後の「政道」については光秀とよく「相談」してあたるよう、藤孝に指示していることである。これらは、藤孝の丹後支配に対する光秀の監督権の存在と、織田政権下の畿内近国における彼の卓抜した地位を示すものである。

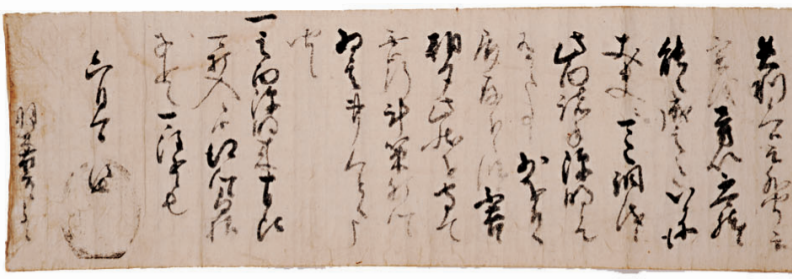


(14)(天正八年)八月廿二日　織田信長黒印状

1通　29.2×45.8

8月20日に藤孝・光秀が丹後から発した注進状(ちゅうしんじょう)に対する信長の返書である。藤孝らのもとに出頭せず、「野心」を示した吉原西雲なる国人(こくじん)領主とその一党を討ち果たしたとの注進を、信長は是認している。本文書は、丹後入国直後の藤孝が、丹後在来の武士領主たちを出仕(しゅっし)させて主従関係を結ぶ手続きを進めたこと、さらにそれが明智光秀と共同で推進されたことを示している。

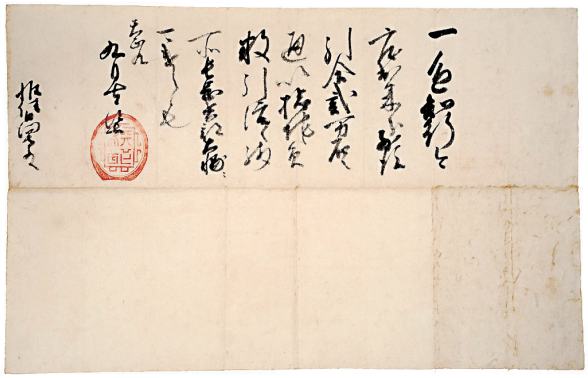




(15)(天正九年)六月一日　織田信長黒印状

1通　14.3×133.0

因幡鳥取城攻めを担当する羽柴秀吉に対して、信長が五ヵ条にわたって指示を書き送った黒印状。第四条には、「重要な城なので侮って敗れるようなことがあってはならない。朝も夜もこの黒印状に書いてあることを守り、油断なく励め」とある。本文書は、鳥取城攻めに援軍を派遣する藤孝に信長の戦略方針を正確に伝えるため、秀吉から藤孝に転送され、細川家に伝来したものとみられる。



(16)天正九年九月七日　織田信長朱印状

1通　30.3×47.3

藤孝の丹後支配を監督する明智光秀に対して、丹後国最大の在来勢力であった一色氏の知行高確定と、検地によって一色領に生じた石高増加分(「出来分」)の処置について指示した朱印状。一色氏の知行高は二万石とされ、検地増加分は光秀の手を介して藤孝に移管するよう命じている。丹後支配の根幹をなす検地・知行配分・藤孝蔵入地の設定について、光秀が全面的に関与していた事実を示す。

(17)(天正九年)九月十六日　織田信長黒印状

1通　31.4×50.4

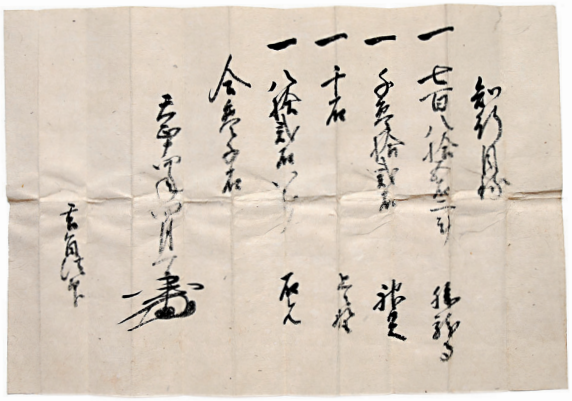
藤孝の老臣松井康之の因幡・伯耆方面での活躍を信長が賞した黒印状。丹後の水軍を組織した松井は、鳥取城を攻める秀吉軍に兵粮を搬入するのみならず、伯耆の泊城、因幡西部の大崎城といった毛利方の拠点を攻略し、敵船を多数撃破して城下を焼き払った。毛利方の鳥取救援を断つ松井の働きが信長の中国地方戦略に大きく貢献したことが、彼を名指しで称賛した本文書に表現されている。

(18)(天正十年)四月廿四日　織田信長朱印状

1通　31.5×51.2

信長の藤孝に対する現存最後の指令文書である。指示次第で備中まで出陣可能なように準備に専念しろと伝える本文書で注目すべきは、命令の詳細は明智光秀から伝える、とした末尾の記述である。信長は死の直前まで光秀の権限に依拠しながら、藤孝らに軍事命令を伝達していたのであり、光秀への信頼には微塵の陰りも感じられない。「本能寺の変」は、この一月余り後に勃発する。

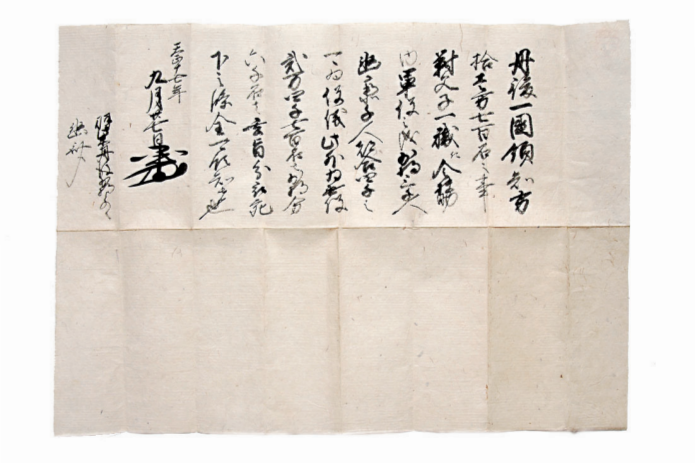
2．羽柴秀吉文書



(19)天正十四年四月一日　羽柴秀吉知行目録

1通　30.5×45.5

秀吉が「玄旨法印」すなわち幽斎に山城国西岡に三千石の知行を宛行った際に発給された知行目録である。幽斎のかつての本拠地であった勝龍寺、及びその周辺の神足、上之野、石見といった村々に知行が設定されたことがわかる。この知行宛行は、丹後支配を後継者忠興に任せた幽斎が、豊臣政権の中枢たる京都において秀吉から求められた文化的・政治的活動に対応したものであった。



(20) 天正十七年九月廿七日　豊臣秀吉知行宛行状

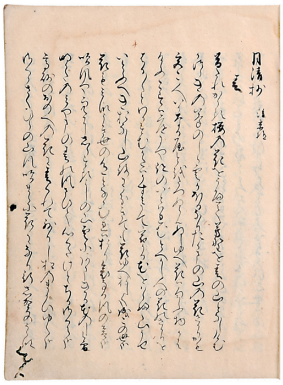
1通　46.0×65.5

細川家が丹後一国十一万七百石の豊臣大名となったことを示す知行宛行状。忠興・幽斎それぞれの軍役人数と無役高の数値を明記しており、つづく小田原出兵、そして朝鮮出兵に際しても、細川家はこの数値に基づいた軍役を果たすことになった。

以上、執筆は永青文庫研究センター教授　稲葉継陽。
法量は本紙の縦×横で単位はセンチメートル。

3．文学・有職故実

（奥書）

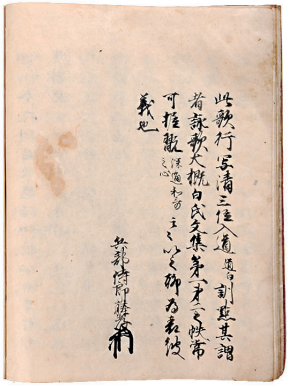


（冒頭）

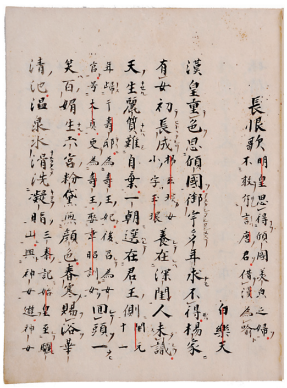
(21) 六家集

1冊　室町末期写　25.8×20

平安時代末から鎌倉時代初にかけて活躍した六人の歌人、藤原良経・慈円・藤原俊成・西行・藤原定家・藤原家隆の歌をそれぞれの家集から精選し、四季・恋・雑に分けて集成した歌集。連歌師の肖柏が永正2年(1505)に書写し、平雅連に与えたもので、一般に『六家抄』と呼ばれる。当本は、奥書に曾我武庫の手を借りて書写したとある。曾我武庫は曾我助乗、足利将軍にともに仕えた藤孝の同僚であった。（森）



（奥書）



（冒頭）

(22) 長恨歌琵琶行

1冊　室町末期写　25.6×20.3

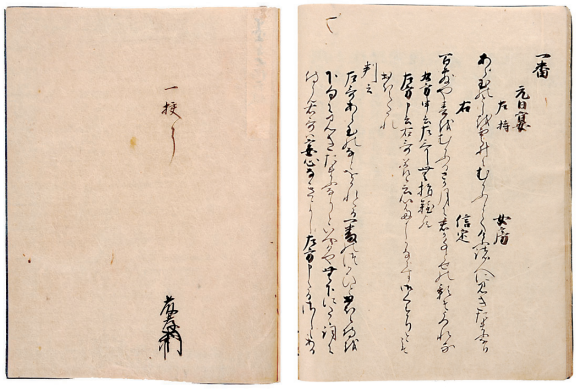
長恨歌と琵琶行は唐の白居易（白楽天）の詩で、源氏物語をはじめ日本の文学に大きな影響を与えた。二作を合わせて「歌行」と呼ぶ。藤孝の奥書にあるように、藤原定家も『詠歌大概』のなかで白楽天の詩が和歌の心に通ずるとして重視した。奥書に、清三位入道道白の訓点を写したと記す。道白は漢学者清原宣賢の孫の枝賢で、幽斎の母方の従兄、天正9(1581)年に入道して道白と称した。（森）

（奥書）　（冒頭）

(23) 今花集

1冊　室町末期写　25.7×20

後柏原天皇（1464～1526）と三条西実隆の歌集。文亀３年の桃花節（３月３日）の御着到百首和歌、同年９月９日の公宴の折の和歌、内裏着到和歌、永正８年３月３日の、御着到和歌の４つの歌会における２人の和歌を収集したもの。御製と実隆の歌を、並べて載せる。孤本であるらしく、他に伝本をみない。おのおのの和歌は、後柏原天皇の『柏玉集』、三条西実隆の『雪玉集』の家集に収められる。後柏原天皇は、実隆の弟子であった。（徳岡）

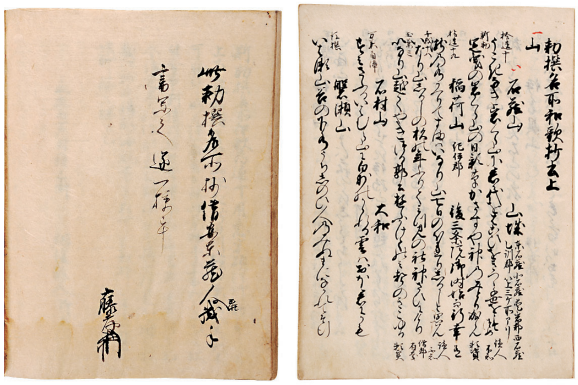


（奥書）　（冒頭）

(24) 六百番歌合

4冊　室町末期写　25.7×20.0

建久３年から４年にかけての藤原良経主催の歌合。千五百番歌合とともに、歌合の白眉とされる。幽斎は、生涯に歌合を多数書写しているが、特に、慶長４年(1599)～５年にかけての書写が集中する。これらは、智仁親王への古今伝授と同時期に宮中より借りだして書写したものである。しかし、この六百番歌合は、書写年次は不明なものの、藤孝の署名があるので、天正10年(1582)あたりまでの書写であろう。（徳岡）

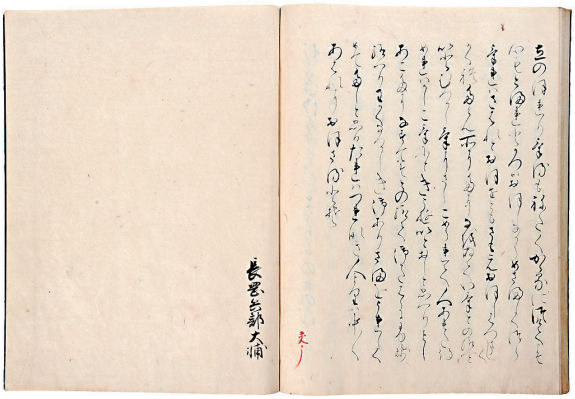


（奥書）　（冒頭）

(25) 勅撰名所和歌抄

2冊　室町末期写　25 .5×20

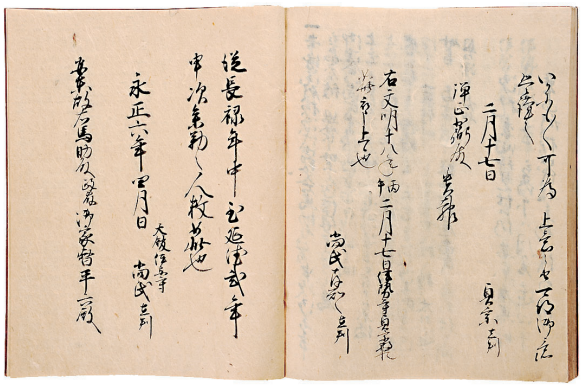
勅撰集に詠まれる名所和歌を歌枕ごとに数首並べ、連歌の式目にいう、本歌付（本歌によって付合がなされること）の参考に連歌師宗碩(1474～ 1533)が著したものである。そのことを示す三条西実隆の永正３年(1506)６月の本奥書がある。実隆の日記『実隆公記』同年６月４日条に、宗碩に所望されて奥書を記したことが記されているので、奥書の日付が特定できる。のち、幽斎は徳川家康に所望されて、名所和歌の書抜きを送っている。（徳岡）



(26) 源氏物語

54冊　室町末期写　26.4×20.6

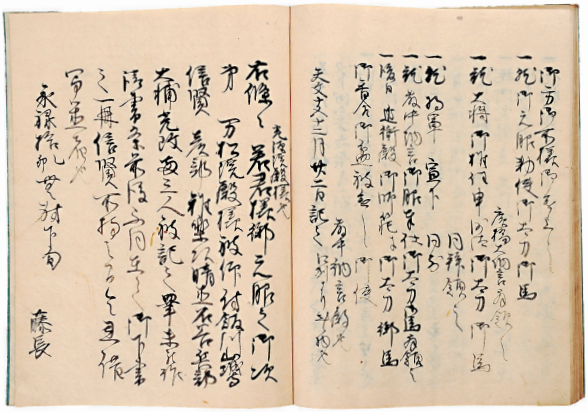
源氏物語の寄合書。寄合書とは、大部な典籍類の場合、何人かで手分けして、書写したものである。各々の巻末に記す筆記者に従い主だった書写巻と人物名を掲げると、桐壺巻は青蓮院殿尊朝親王、空蝉・蓬生巻は飛鳥井雅庸、夕顔巻は徳大寺公維、若紫・花散里・野分・蜻蛉巻は今出川晴季、末摘花・乙女巻は昌叱、竹川・椎本巻は曽我兵庫頭平助乗など。幽斎は帚木巻を写している。巻末に「長岡兵部大輔」と記される。（徳岡）



(27) 申次記録

1冊　室町末期写　24×19.8

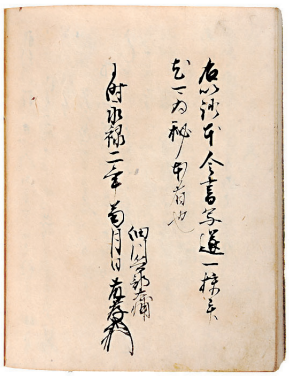
室町幕府の申次の職務に関する故実書。申次は将軍の御所に参上した者の名や用件を取り次ぐ役。本書は、安東政藤が１月より１２月までの作法を旧記と大館尚氏の説とを取りあわせて記録したもので、永正６年(1509)に政藤の後継・平六に宛てて尚氏が証明を与えたもの。当本は、筆跡から判断して、安東蔵人泰職の書写と認められる。泰職は平六の同族と見られ、将軍足利義輝・義昭に仕えて申次を務めている。幽斎が泰職より譲渡されたものか。(森)



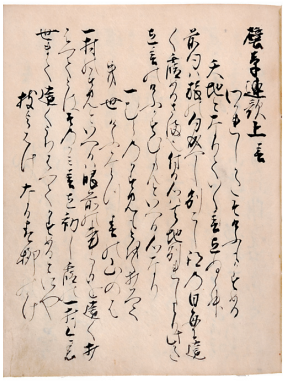
(28) 御元服条々記

1冊　永禄10年写　25.7×20.1

足利将軍家の男子の元服儀式に関する故実書。奥書によれば、光源院(足利義輝)の元服の次第を、飯川信賢らが記録していた草稿を、一色藤長が借用して永禄10年(1567)９月下旬に書写したもの。書写の頃は、前将軍義輝の弟・覚慶を還俗させて義秋とし、次の将軍として擁立すべく、藤孝ら足利の旧臣たちは越前の朝倉氏のもとにあった。この頃、藤孝は室町幕府の故実書の収集を心がけていたことが知られる。(森)



(奥書)



(冒頭)

(29) 壁草連歌

1冊　永禄２年写　19.9×16.2

永正９年(1512)の連歌師宗長(1448 ～ 1532)の自撰第一句集。四季・旅・恋上下・雑上下・発句の10巻からなる。宗長が、越後にいた師宗祇を見舞い、指導を仰いで編纂、以後改訂を続け、宗祇の句集『老葉』『下草』に準じて名付けたという。諸伝本は３類に分類されるが、当本は、１類に属し、宮内庁書陵部蔵旧斑山文庫本と同内容である。藤孝が、永禄２年(1559)９月に書写し、奥書を付したものである。(徳岡)

以上、執筆は社会文化科学研究科教授　森正人・永青文庫研究センター客員准教授　徳岡涼。
法量は表紙の縦×横で単位はセンチメートル。

※ 出品作品は全て公益財団法人永青文庫所蔵
のもので、熊本大学附属図書館寄託品である。

第 27 回熊本大学附属図書館貴重資料展

若き日の細川幽斎

―永青文庫蔵・織田信長文書を中心に―

熊本大学文学部附属永青文庫研究センター　編著
平成 22 年 10 月刊　熊本大学附属図書館

本目録の無断転載・複製を禁ずる。